

北海道 1300 年における空間の変化と連続性 —アイヌ語地名の空間プロットをもとに—

北海道 アイヌ文化 アイヌ語地名
 擦文文化 オホーツク文化

序論

第 1 章 本研究について

■ 1-2 研究の目的

北海道の地名の由来の多くはアイヌ語である。アイヌ文化は文字を持たない文化であったが、生活の中で頻繁に利用する場には名前をつけていた。アイヌ民族による地名はその場の環境的・地理的状况を実に平易に示しているため、文字にしなくとも共通認識をもちやすかったのであろう。そして和人が侵略した後に、その地名に文字が当てられ現在にまで残されている。行政による地名化がなされたのは一部であるが、言い換えればアイヌ語地名を当てられた場所はアイヌ民族が生活に利用しており、かつ現在も人が住み続けている場所である、ということになる。そこで、現存するアイヌ語地名を、現代におけるかつてのアイヌ民族の影響の一端として、アイヌ以前からアイヌ時代、そして現代までの連続性を見出ししていくことを目的とする。その目的を達成するために、本研究では次の二つの段階を踏む。

STEP1 アイヌ語地名を地図上にプロットし、アイヌ語地名立地の類型化を行う。

STEP2 STEP1 を行った上で、アイヌ以前から、アイヌ文化時代、そして現代とを比較考察し、その連続性を見出す。

■ 1-3 研究の方法

本研究の主要参考文献として北海道環境生活部アイヌ政策推進室が公開している「アイヌ語地名リスト」¹を用いる。これは山田秀三²『北海道の地名』(北海道新聞社,1984)を中心にその他自治体刊行物から、平成 19 年 1 月末までの市町村名及び多くの人が訪れる主要観光地については和名起源含め全て載せ、またその他現在使用されている名称がアイヌ語起源とされているものについてまとめている。本研究においては、上記文献批判から始め、現存するアイヌ語地名をプロットするにあたっての条件設定及びそれを踏まえたリストの再編纂を行う。その後、プロットを多種の地図と合わせ、アイヌ民族の生活の特質を見出す。そしてある一地域の現地調査及びアイヌ語地名の意味に着目してアイヌ - 現代の連続性を、北海道教育委員会が道内の埋蔵文化財包蔵地をまとめた Web ページ「北の遺跡案内」³における遺跡情報と合わせることで、擦文文化時代 - アイヌの連続性を見出し、それらを合わせて北海道 1300 年における変化と連続性を論じる。

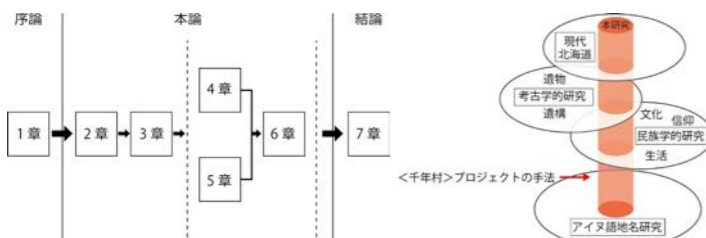


図 1 論文構成

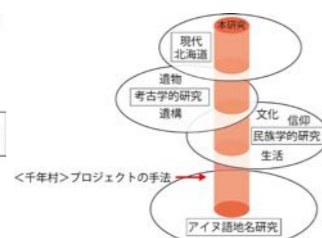


図 2 本研究の位置づけ

2015.11.09
 卒業論文発表会
 中谷研究室
 <千年村>研究ゼミ
 1X12A088-6 鈴木明世

本論

第 2 章 <アイヌ語地名の空間プロット>の批判と定義の設定

第 2 章ではまず、『北海道の地名』及び「アイヌ語地名リスト」で用いられていた手法について分析した。山田が複数の既往研究を収集し、解の出自と分岐を明確にしたことでそれぞれのアイヌ語地名について解釈を比べることが可能になった。これによって、アイヌ語地名のより深い検証が可能になり、アイヌ語地名の意味が妥当性を持って場所と結びついたと考えられる。

また、<千年村>プロジェクト⁴において、空間プロットという手法について検証し、<千年村>を地図上にプロットしたことで、現代社会と古代社会との空間的な結びつきを視認化し、様々な角度からの分析が可能になったことを確認した。

そこで、本研究において<アイヌ語地名の空間プロット>とは、アイヌ語地名というツールを介してかつて存在したアイヌ文化と現代社会を空間的に結びつけそれを可視化する行為であると同時に、アイヌ文化時代の前後にある空間的変容をたどるひとつの手段である、と定義した。

第 3 章 アイヌ語地名の抽出とその立地分類

■ アイヌ文化と空間的に結び付けられた現在地の抽出

原則として単一大字以下及び複数大字に該当するアイヌ語地名を空間プロットするとして、アイヌ文化と空間的に結びつけられた現在地を抽出した。その該当数は、単一大字以下が 570 個、複数大字が 50 個の計 620 個であった。プロット結果を図 8 に示す。

比定の類型						
単一字及び大字	複数大字	市町域以上	和名地名	環境表現名	存在しない	不明
570	50	83	84	219	18	8

図 3 アイヌ語地名の比定の類型

■ アイヌ語地名の立地分類

航空写真・色別標高図・地形分類図の 3 種類の地図に抽出されたアイヌ語地名をプロットし、その立地特性の把握を行った。そこから、海岸沿い型・谷底平野型・平地型の 3 種類に分類し、それぞれ 291・262・67 であった。アイヌ語地名と自然環境の関わりを実見する際には谷底平野型に着目する事が重要である。また、ほとんどのアイヌ語地名が河川を内包している事から、アイヌ文化時代から現代までの変遷を考察する際には一つの河川流域に絞って調査する事が望ましいとした。さらに、この立地分類をアイヌ以前の遺構などと比較する事で、比較を行う事ができるとした。つまり、<アイヌ語地名の空間プロット>を行った事によって、これまで断続的な研究しか行われてこなかった北海道を、擦文文化⁵オホーツク文化⁶時代から現代までを一つの連続した流れのもとに分析を行う事が可能にしたのである。



図 4 アイヌ語地名の立地分類

第 4 章 アイヌ文化時代から現代への連続性

■ アイヌ語地名の現在

一調査した 8 つの地域についての微視的分析
 一つの河川流域に着目し、下流から上流へ連続したいアイヌ語地名の現在を見るとして、沙流川流域の 8 つの連続したアイヌ語地名⁷を現地調査した。そこで、地名内で集落立地の小移動が起きたこと、その地域に住み続けるためにダムを建設し水害の被害をなくしていたことが分かった。また、アイヌ文化の記憶を失わないために、積極的に文化の引き継ぎを行っていることが聞き取り調査によって分かった。

■ 現代社会に浮かび上がるアイヌの軌跡

アイヌ語の「ル」は狩猟時や集落間移動、地方間の移動の際の山越えのための通路に当てられた言葉である。明治から対象にかけてその「ル」が鉄道や道路に変化したことを文献調査から論じ、アイヌ語地名で「ル」を内包する地区を抽出し、鉄道と合わせることでその事実を空間的に把握した [図 9]。

■ アイヌ文化時代から現代への連続性

それらを合わせてアイヌ文化時代から現代までの連続性を考察した。アイヌ文化時代は、高台に集落を構え、「ル」を用いて狩猟や物資の調達のために地方間移動を行っていた。その人の流れは現代にも残されていることを発見した。これらの変化が起きた要因は、和人の侵入による社会的・文化的変容であり、強制的な空間の変化が生じたが、そこに住み続けた人々は同地域内でより持続可能な立地を選んで生活を続け、無意識化のうちにアイヌが利用していた通路を用いているのである。これらのことから、アイヌ文化時代と現代は歴史的な認識では分断されているが、集落立地や生活の面で見るとアイヌの名残が存在しており、一つの連続した流れで捕らえることが可能であるとされた。

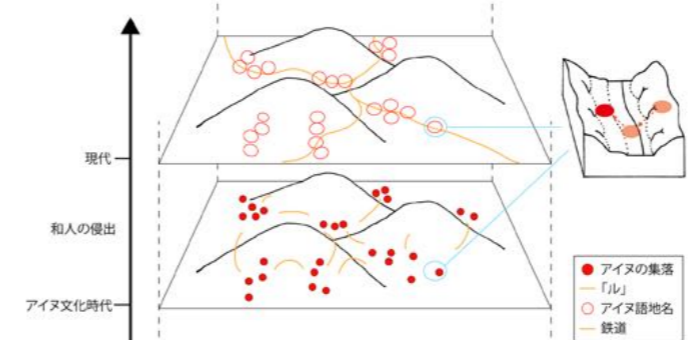


図 5 アイヌ文化時代から現代への連続性

第 5 章 擦文文化・オホーツク文化時代からアイヌ文化時代への連続性

第 5 章では、北海道教育委員会が一般公開している埋蔵文化財包蔵地から、擦文文化時代・オホーツク文化時代のもの抽出しプロットすることでアイヌ語地名立地との比較を行った [図 10]。また、擦文文化時代からアイヌ文化時代への連続性を述べ、擦文文化にオホーツク文化が組み合わさることでアイヌ文化が形成されたと再確認した。それらを合わせて、擦文・オホーツク文化時代からアイヌ文化時代への集落立地の同意性と変化を確認し、鉄器所有量や人口増加などの観点から代価物資としての狩猟の増加による生業の変化によってその集落立地の広域化を示した。これによって、少なくとも擦文文化・オホーツク文化時代にはアイヌ文化に向けての集落立地や生業の土台ができており、アイヌ文化時代までの一つの潮流のもとに語る事ができる事を見出した。

化時代への民族としての連続性を述べ、擦文文化にオホーツク文化が組み合わさることでアイヌ文化が形成されたと再確認した。それらを合わせて、擦文・オホーツク文化時代からアイヌ文化時代への集落立地の同意性と変化を確認し、鉄器所有量や人口増加などの観点から代価物資としての狩猟の増加による生業の変化によってその集落立地の広域化を示した。これによって、少なくとも擦文文化・オホーツク文化時代にはアイヌ文化に向けての集落立地や生業の土台ができており、アイヌ文化時代までの一つの潮流のもとに語る事ができる事を見出した。

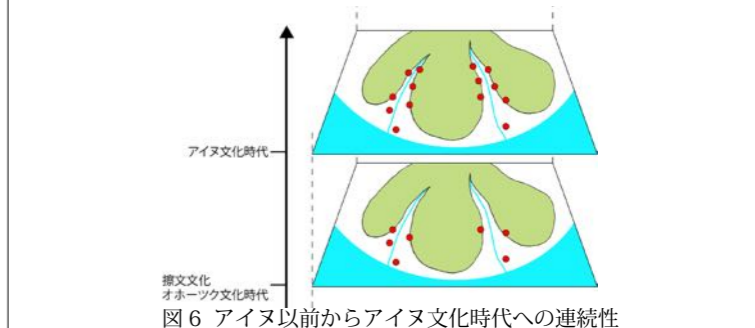


図 6 アイヌ以前からアイヌ文化時代への連続性

第 6 章 考察：北海道 1300 年における空間の変化と連続性

■ <アイヌ語地名の空間プロット>による各時代の接続

<アイヌ語地名の空間プロット>がもたらす成果を第 4 章、第 5 章の分析へと結びつけ、アイヌ語地名をプロットしたことで、アイヌ文化時代とそれ以前、そして現代とを空間的に接続し、断続的な流れでしか研究されてこなかった北海道を一つの大きな流れの中でその連続性を分析する事を可能にしたと論じた。

■ 北海道 1300 年における空間の変化と連続性

第 4 章、第 5 章において考察したことを、時間軸的に整理した。そこから、擦文文化までを<空間の形成期>、アイヌ文化前後を<空間の展開期>、和人の侵入から現代までを<空間の変容・持続期>として、連続した流れの中で<空間構成の段階変化>が生じていたことを導きだした。これまでの研究では断続的に考えられていたが、その区切りが<空間構成の段階変化>の時期とほぼ一致する。<アイヌ語地名の空間プロット>を行ったことで、北海道に置ける断続的な流れが一つの連続した流れの中で論じることが可能になった。

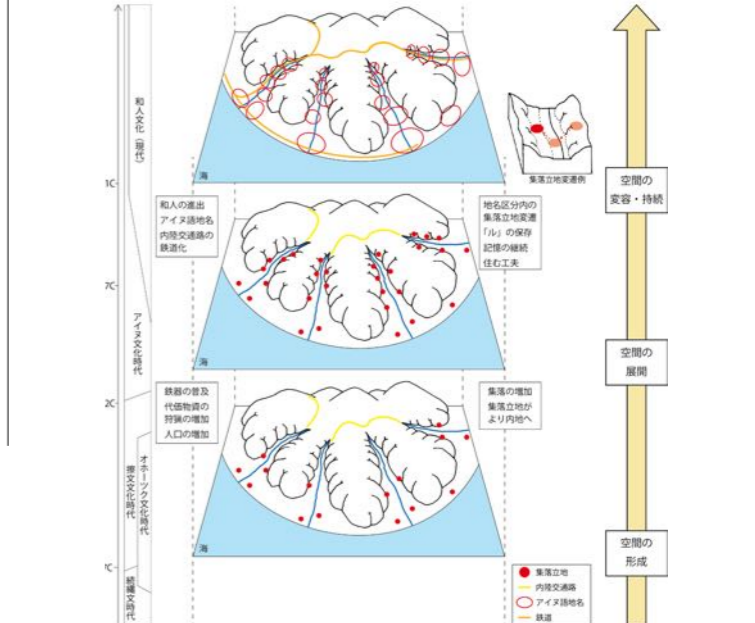


図 7 北海道 1300 年における変化と連続性

目次構成

【序論】

第1章 本研究について

- 1-1 はじめに
- 1-2 研究の目的
- 1-3 研究の方法
- 1-4 本研究の基礎情報
 - 1-4-1. アイヌ文化概要
 - 1-4-2 アイヌ語地名の成立
- 1-5 既往研究
 - 1-5-1 アイヌ語地名の既往研究
 - 1-5-2 本研究の根幹にある既往研究及び既往活動
- 1-6 本研究の位置づけ

【本論】

第2章 <アイヌ語地名の空間プロット>の批判と定義の設定

- 2-1 はじめに
- 2-2 引用文献の批判的分析
 - 2-2-1『北海道の地名』の分析
 - 2-2-2『北海道の地名』から「アイヌ語地名リスト」へ
 - 2-2-3 現代社会におけるアイヌ語地名
- 2-3 空間プロット手法の批判
 - 2-3-1 <千年村>研究の基盤となる考え方
 - 2-3-2 <千年村>プロジェクトにおける空間プロット手法の意義
- 2-4 <アイヌ語地名の空間プロット>の定義
- 2-5 小結

第3章 アイヌ語地名の抽出とその立地分類

- 3-1 はじめに
- 3-2 アイヌ文化と空間的に結び付けられた現在地の抽出
 - 3-2-1 比定の原則
 - 3-2-2 結果
- 3-3 アイヌ文化と空間的に結びつけられた現在地の立地特性
 - 3-3-1 手法
 - 3-3-2 アイヌ語地名立地の類型化
- 3-4 考察と<アイヌ語地名の空間プロット>による展開
- 3-5 小結

第4章 アイヌ文化時代から現代への連続性

- 4-1 はじめに
- 4-2 アイヌ語地名の現在調査した8つの地域についての微視的分析
 - 4-2-1 地域の選定理由
 - 4-2-2 調査地概要
 - 4-2-3 調査地におけるアイヌ文化時代から現代への変遷
- 4-3 現代社会に浮かび上がるアイヌの軌跡
 - 4-3-1 アイヌ語地名の「ル」について
 - 4-3-2 和人による新道切り開きと鉄道
 - 4-3-3 現代社会に浮かび上がるアイヌの軌跡
- 4-4 アイヌ文化から現代への連続性の考察
- 4-5 小結

第5章 擦文文化・オホーツク文化時代からアイヌ文化時代への連続性

- 5-1 はじめに
- 5-2 埋蔵文化財包蔵地のプロット
 - 5-2-1「北の遺跡案内」について
 - 5-2-2 本章における手法
 - 5-2-3 埋蔵文化財包蔵地の抽出とプロット
- 5-3 擦文文化・オホーツク文化時代からアイヌ文化時代への連続性の考察
- 5-4 小結

第6章 考察：北海道1300年における変化と連続性

- 6-1 はじめに
- 6-2 <アイヌ語地名の空間プロット>による各時代の接続
- 6-3 北海道1300年における変化と連続性
- 6-4 小結

【結論】

第7章 結論

結論

あとがき・謝辞

参考文献

巻末資料

[注釈]1.「北海道環境生活部アイヌ政策推進室アイヌ語地名リスト」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_timeist.htm (2015.11.09 現在) 2.やまだひでぞう、1899-1992、アイヌ語地名研究家。東北や北海道などの多くのアイヌ語地名を現地実証により研究した。主な著書に『アイヌ語地名の研究〈1〉〜〈4〉山田秀三著作集』(草風館,1982)、『北海道の地名』(北海道新聞社,1984)などがある。3.「北海道教育庁文化財博物館課 北の遺跡案内」<http://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/kitanoisekiannai.htm> (2015.11.09 現在) 4. 2011年より早稲田大学中谷研究室及びランドスケープデザイナー(現慶応大学教授):石川初、建築家:福島加津也、写真家:大高隆らによって発足された。2012年度には、千葉大学:木下研究室や関西圏に拠点を置く清水重敦や菊地暁らによる研究組織へと展開。数多の災害を乗り越え、現在まで生存してきた集落地域を、環境・集落構造・交通・共同体の観点から評価することを目的とするプロジェクト。このプロジェクトでは、長く続く集落地域の目安として1000年を採用している。5.さつもんぶんか。北海道における縄文文化に続く文化。擦文土器・鉄器を使い、竪穴住居に住み、狩猟・漁労・雑穀栽培を行なった八〜三世紀の文化。(三省堂『大辞林』より) 6.オホーツクぶんか。本州の平安時代に並行する時期に、北海道のオホーツク海沿岸・サハリン・千島に発達した金属器を伴う石器文化。海岸部で狩猟・漁労生活を営んだ。(前掲)なお、この時代は住居内に熊の頭骨を集積するなど、熊に対して何らかの信仰を持っていた。このことからアイヌ文化の精神文化に大きく影響を与えたと考えられている。7.下流から紫雲古津・去場・荷葉・平取本町・小平・二風谷・荷負・貫気別

[図版出典] 図1.筆者作成 図2.筆者作成 図3.「アイヌ語地名リスト」をもとに筆者作成 図4.筆者作成 図5.筆者作成 図6.筆者作成 図7.筆者作成 図8.GoogleEarthより筆者作成 図9.GoogleEarthより筆者作成 図10.GoogleEarthより筆者作成



図8 アイヌ語地名の空間プロット



図10 アイヌ語地名と擦文文化・オホーツク文化時代の埋蔵文化財包蔵地との関係

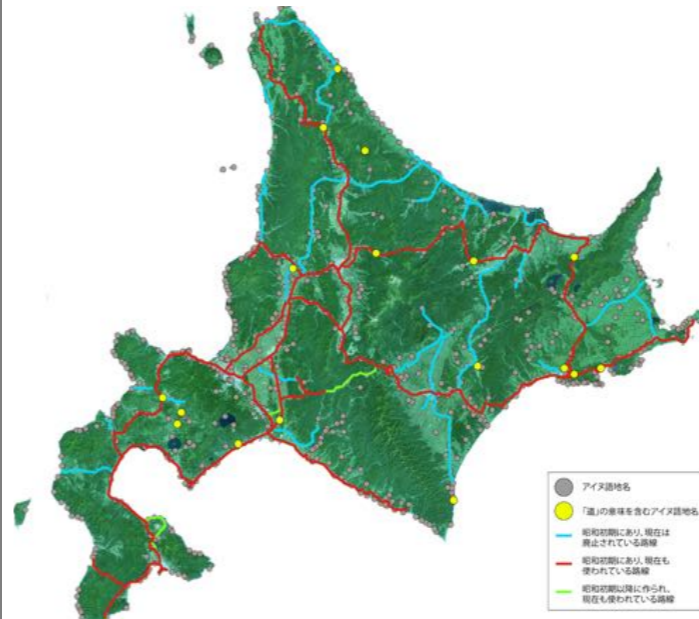


図9 アイヌ語地名の「ル」と鉄道の関係